

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-02-19

## 法政大学史学会々報 第3号

法政大学, 史学会

---

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大學史學會々報 / 法政大學史學會々報

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

22

(発行年 / Year)

1952-01-23

A
7d
29



法政大學

史學會之報

(第3号)



(1952)

法政大學史學會發行

目次

題字 藤井甚太郎  
カッ卜 渡部省三

一、巻頭の辞	会長	藤井甚太郎	1
二、公開講演要旨			2
インドの封建制	教授	和田久徳	2
米国の極東政策	講師	清水博	4
近世初期に於ける日本と南洋との関係	〃	岩生成一	6
三、西誠の紫草	大学院	久下司	8
四、足利学校と鏡阿寺(史蹟紹介)		(安岡委員)	11
五、会員隨想		竹内直良	14
思ひつゝいたまへ		酒巻正三郎	14
若年寄		(櫻井委員)	16
六、会務報告		(会計委員)	18
七、会計報告			19
八、クラス便り			19
四 年		(丹治生)	19
三 年		(寺沢生)	19
九、卒業生消息			20
一〇、卒業論文題目(新制第二回)			21

# 巻頭の辞

会長 藤井甚太郎

巻頭の言葉として、茲に本会の使命を敘して、会員各位の志心廣に試み、一言を述ぶることを許されたい。法制大学の旧制及新制大学史学科の教師、学生及卒業生を以て組織せられてゐる本会は、茲に足懸け四年を迎へた。その間年々祖列の行争として公開講演、研究旅行、例会の開催等、漏れる筈なく之を行つて、歴史学と学芸として、自覚しき活動を続け、年圧を多く経た諸史学会に比して、何等遜色なきに至つた。

これは偏に会員各自が眞面目に本会を支援せらるゝの致す処である。尚今後各方面に活躍をばすべし諸般の準備を着々進めつゝある。

恐ふに歴史の研究は、近年其方法論と其学域に於いて、副期的時機に遭遇してゐる。その方法論に於いては、一部の学徒間に唯物史観がやゝもすれば重視せられつゝあることである。その学域といふのは、中学校の教授上歴史科が一体系を解林して社会科の中に織り込まれたことである。この二傾向は確かに斯学会に新機運を孕んでゐると推定することが出来る。青年学徒がこの表面の奔流に惑惑せられて、本会の歴史学の土台を踏及過ることがある。我が法政大学史学科の學風は、徒に時流に攝されず、確乎不動の基礎原理に基

き、堅実なる學風を堅持しつゝ、一歩々々研究に精進すべきであることを主義としてゐる。

本学の門に入らるゝ学生は、年と共に増加しつゝある。これに應ずべく学校当局に於いても、史学科のために年々百二十單位の講座を設けてゐる。此れに他学科に前講せられてゐる補助学科の講座数を加算すれば莫大なる数となつて、学会の偉觀と称し得るのである。

そもそも史学の深淵なる三四年を以てして、その藎與を極むべきでない。要は卒業後に於いて研究を繼續することに於ける。我が史学会には、この共に於いて重大なる責任が課せられてゐる。年と共に卒業の諸君を校外に送ると共に、会の使命は益々重大となるものがあること云はなければならぬ。本会は各自の研鑽上の連絡となり、切磋相勵まるゝに必要なる檢閲となることを期してゐる。かくて本会は欲くは法政大学の史学科のために、広くは天下の史学会のために、貴重にして能力ある一機関として存続することを期してゐる。会員各自はよくこのことを了承せられて、本会を支持せらるゝと共に、又大いに本会を活用せられて欲しい。

## 公開講演要旨一

## インドの封建制

和田 久 徳

歴史の発展法則と云ふことが問題になつて、日本や中国、西欧諸国などの封建制度・封建社会の史的研究が盛んであるが、インドのことはこれまで余り問題にされてゐない。インド史の研究が極ひ進み、他の地域に比べて遅れて居るのが最大の理由であるが、古い歴史を有ち、特殊な社会の発達の仕事をして来たインドについて、その封建制度を明らかにすることはインド史自体は勿論、広く世界史的観照からも大切なことである。

インドの封建制度を問題にする場合、その時期が何時から何時までであるかと云ふ封建制度の成立や崩壊の問題、インド特有のカスト制度との関係についてなど重要な事柄が多いが、こゝには問題を限つて、回教インドの封建制度、特にその中心機構をなすジャギール制 *Jagirs* 制を取り上げ、これによつてインドの封建制度、社会がどのやうな性質のものかをやゝ具体的に明らかにしてみたい。大きな制度の一面、一例ではあるが、その中心、根幹をなす事実であるから、根本的事項は略々明らかにすると思はれる。

ジャギールと云ふ制度は一口に云へば、回教イン

ド(一ニ〇六一一八〇三)即ち十三世紀初めから十八世紀頃までにかけてのインドの社会に行はれた一種の封土制度である。ジャギールと云ふ語は本来ペルシヤ語で「或る場所を占める」と云ふ程の意味であるがこれがインドに於てはアラビヤ語イクターアと同様の意味に使はれた。即ち、此の時代、役入その他に賜与地として或は俸給の代りとして、国家の土地の一定部分を讓渡することがあつたが、かうした土地をジャギールと云ひ、ジャギールの被讓渡者をジャギールダール(ジャギールヤールの所有者)と呼んだ。要するに、一般には官僚貴族の奉仕に對する現金給与の代りとして、一定面積の生産物に對する国王の取分を、それそれ讓渡するもので、讓受人は、その地域の行政を執行し、地租を賦課し徵集する權利を認められる。その土地の広さは、官取地社の高下によつて大小があり、一人で一州全体をジャギールする位の大きなものもあるが、また教村或は一村だけの狭い所領のものもあつた。

この制度の起源については明確な史料を欠いてゐてはつきりしない。当然、略々同じ時代にインド以外の回教諸国家に行はれた封土制度(イクターアなど)と深い関係があることは考へられるが、また一方、回教化以前のインドにも、此れと似た制度が存したらしい記録があるから、元々先駆的の制度があつた上に此の時

代に回教特有の制度が入つて来て完成されたものと考えられる。

元来は現金の俸給に代る実物（地稅）給与の意味であつたが、一度受けたジャーギールは、とかく世襲的になり易く、またジャーギールに対するジャーギールカールの支配権力は、直接で絶対的となり、国家権力の干渉を排除して私有地化されるのであつて、特に王権の弱い時代には、事實上封土と同じ性質のものとなる。さうして、王権を更に弱めたり、或は対抗的勢力を形成し易い。

こゝに中央集権を企図する国家権力と、ジャーギールに対する権利を最大限に拡張して自らの利益を図らうとするジャーギールダール（官僚貴族たち）との利害の対立が生ずるのであつて、かうした矛盾は此の制度の続く限り存する。さうして、時にはハルジー朝のアラーウツデイン（一五九六一—一六一六）・ムガール朝のアクバル（一五五六—一六〇五）のやうに、現金給与による王直屬の常備軍を設置して王権の確立強化を図り、ジャーギールを全廢しないまでも、これを無意味なものにした時期もあつた。しかし、大勢から云つて、時代の下るにつれてジャーギールの数が増して王領が激減し、同時にジャーギールダールの各自の所領に対する権力も漸次拡大強化されてゆき、時には完全な封建諸侯の状態を示すこともあつた。大体、十七

世紀が此の制度の完成期とも云ふべきであるが、長い發展期間中には、同じジャーギールダールの中にも、云はゞ大名と根本のやうな分北が見られたり、實際に現地で地租を徴集せず、租稅額の権利証書を國王より受けて、これを首都の金融業者に手形割引して貰ふ、云はゞ札差に似た機關の活躍を見たり、いろ／＼注目すべし事実がある。

しかるに、十八世紀に入ると、この制度は急速に衰へた。それは、今までと逆に官僚貴族がジャーギールを嫌ひ、国庫からの現金給与を望むやうになつたからである。かうした変化は、当時ムガール帝國が衰亡期に入つた結果として現れた諸事情に基くのであつて、例へば、此の時分、ジャーギールダールの控取によつて農業生産力が衰退して、所定の地稅收入を確保し難くなつたこと、その上、新興のマラーター族の要求に對して、年々地租の一定割合を割かなければならなくなつたこと、また中央権力弱化の結果、ジャーギールの権利が皇帝の名によつて保証され得ず、とかく實力次第となつたことなどが主な理由であつた。このために、以後は此の制度は次第に衰へ、名残は後世まであるが、歴史的な意味はなくなるのである。

一方、有力者は中央集権の弱化、時勢の混乱に乗じて、自己の實力の下にその勢力範囲を獲得して行き、こゝに自由競争の新しい封建割據の状態が現出する。

## 公開講演要旨二

## 米国の極東政策

清水 博

米国の外交はその特異の政治機構、即ち行政当局たる大統領—國務長官と條約批准の權をもつ議會及び政治を左右する世論の三者からなり、他国に比して秘密外交の余地が少く、その裏からみれば面白くないといわれる。

米国の外交政策は地域的に考えて対政、対米洲、対極東外交の三者に区別し得る。オ一の対政外交は先進国に対するもので、米國は二十世紀初頭までおしる防衛的立場にあり、ワシントンの告別演説にみられるように、歐洲列強の紛争にまきこまれざらんとした。これがモンロー主義の一面として宣言され、孤立主義外交としてのちに米国外交政策の一潮流をなした。オニの対米洲外交は後進国に対するもので、積極的、独占排他的である。この奥もモンロー主義の中に宣明されている。オニの極東外交はオ一オニの両者の性質を併せ有すると考えられる。その故はアジアは後進地域であるが歐洲列強の勢力と角逐するからで、一面消極的防衛的であると共に他面独占排他的たらんとする面を有する。

極東外交はアメリカ人の関心をよんだ裏からみて、

一六時期初めに一七八〇年代、一八四〇—五〇年代、一八九〇—一九二〇年代、一九三七年以後の四期に分けて考えられる。オ一の時期は独立後始めて米國船工ムプレス・オブ・チャイナ号が中国にいたり、ついデロンビア号が西廻りでボストンより香港を経て世界一周しボストンに帰来し、ボストンの商人に中国市場の有望なことを印象づけた時代である。特にコロンビヤ号船長グレイの語は中国市場の有利であるとの觀念をボストン商人に傳説化したように思われる。これは毛皮貿易の有利をこいたが、その後一部のアメリカ人は中国の土地の広大さと多数の人口と、政治經濟機構の中に濃密とした將來性の期待をよせた。その後対支貿易で巨利を得たボストン商人も居り、マルコポーロ以来極東市場が欧米の商業資本の興味を刺戟していることは争えない事実である。これがオ一の時期の意義である。

オニの時期は阿片戦争に始まる。米國は望厦條約によって英國の得た利益に均霑したがこれは米國がすでに中国市場にかなり進出していたことの証左である。この頃太平洋横断の速度と安全を増強する要望からクリッパー船が建造され、いわゆるクリッパー船時代を来した。この頃はアメリカにおいてもマニフェスト・アステイニイ（膨脹の宿命）が唱えられ、太平洋岸に進出した時代で、西漸運動進展の結果オレゴン・カリ

ウォルニヤを入手したが、特に後者に金が発見されて、ゴールド・ラッシュを来し、太平洋岸地域の重要性が認識されると共に、太平洋の将来性へも関心が払われるようになった。当時北太平洋における捕鯨業も重要であるからハワイ諸島より日本、中国への関心が生じ、早くビドルの系統からついにペリーの系統、日本の開国となるのである。当時米国の太平洋岸基地としてのサンフランシスコの発展は太平洋横断航路の重要性を示し、その中間にある日本列島の価値を認識させた。たゞペリーを未視せしめた推進力が茶辺にあるかはなお検討を要する問題であるが、その一人国務長官ウエプスターがボストンの利益を代表していることは興味がある。これはまた一部政治家の経済的な興味とも、亡び行く商業資本の最後の期待ともみられよう。

しかし南北戦争は極東への興味を中断する。これによって勝利を得た産業資本は急速に発展して十九世紀末には独占を完成する。ここに第三の時期が始まる。

世界史的にこの時代に先行して歐洲列強の帝國主義による世界分割が行われた。この風潮に米國も刺戟されたこと、米國內に一志フロンティアの消滅したことなど相俟つて、一部のマッキンレー、ローズヴェルトなどの政治家、マハンなどの軍人がまず動き、これにモンガンなどの財閥が便乗したのである。かくて米西戦争における比島、グアム島の併合、同年のハワイ併

合、及びこれを正義化せんとするマニフェスト、デステイニイの再振唱或はキップリングの詩「白人の責務」の刊用となった。白人の責務とは後進國を白人が支配してこれに文化の光を与えることは白人の責務であるとする考えであり、これはやがてヘイの門戸開放政策、ローズヴェルトのライジ、ポリシト、タフトの邦外交へと進み、ウイルソンの時この政策不漸く方向転換をするが、それも国内産業助成の要が尚あり、必ずしもその理想主義の故ではない。それゆえ第一次大戦中対華貿易の増大と共に、その任期の末には邦外交に復帰する。大戦前より日本の進出はアメリカと対立した。戦時中は石井ランシング協定にみられる如く一時的対日讓歩をしたが、ワシントン條約で列國と共に攻勢に出た。

第一次大戦後アメリカはその経済的繁栄に満足したが、ニエーデル政策の転換と共に第四の時期が始まる。日本の帝國主義の反響と共に全米國民の関心は始めて極東にそ、がれた。

日本の降服、國民政府の脆弱性の露露の結果生じた極東の眞空状態に朝鮮事案などもおきた。米國にとつて対政外交が依然として第一義的ではあるが、極東政策も開放して考えられず、今や新しい転換を必要とする時期に達したと思われる。



(公開講演要旨三)

## 近世初期に於ける日本と南洋との關係

岩 生 成

日本はアジア大陸の東側に南北に亘つて長く連る列島にして、古代人口も少く生活も素朴な時は自給自足が出来たが、次第に開化し生活が複雑となるに従ひ、他の地方から文物を輸入せねばならなくなつた。幸にして、狭少な海を隔て、古代世界文明発祥地の一なる支那大陸に接近してゐるため、比較的造船航海技術の幼稚な上代から、我が国民は荒海を乗り越えて大陸に渡り、其の産物を輸入し、其の文化を取入れて国民生活の内容を豊にし、文化発達の助けとすることが出来た。然るに明朝の海外貿易制限と我が国内に於ける治安の乱れにより、所謂倭寇が盛となり、終に我が商船の来航を嚴に拒絶したので彼等の正常な交通貿易が全く杜絶した。こゝに我が国民は此の情勢の打開の必要に迫られ、支那以外の第三地南洋各地に於いて、支那商人と密に会して貿易するか、或は支那の産物の代用品を第三地に求める外なくなつた。他方南洋には十六世紀の初頃から歐洲人が進出して来て植民貿易に活動し、琉球人や支那人の南方発展も盛人にして、此等諸国民の活動が我が国民を直接間接刺激して南洋に発展せしめる様になつた。

斯くて近世初期鐵器時代に入ると、我が国民の南洋に進出するもの漸く出て来た。ついで徳川氏が政權を担当するや、和親外交、通商奨励によつて貿易の實利を収め、以て幕制の確立に資し、秀吉によつて創始された朱印船制度を拡大強化したので、朱印船は年々南洋各地に向ひ解纜し慶長以來寛永の鎖国まで三十餘年間に延数三百数十隻に上り、その貿易は其の額も僅も年々増大した。南洋諸國や、特に亦同地方に植民地を有せる葡、西、蘭、英諸國の政府も幕府の外交、通商方針に依りて、その商船を我が國に派すると同時に、屢々使節や國書を遣はして来たので、我が貿易は極めて隆盛となり、彼等の交通は大いに盛んとなつた。

然には斯様な朱印船に便乘したり、或は我が國に來往する諸外船に乗つて南洋に赴き、渡航先に踏み留る者も漸く増加した。殊に彼等の通交貿易の特に盛んであつた呂宋島、交趾(今の安南)、東埔寨と暹羅の四地方に日本人の集田部落日本町も建設された。即ち呂宋島マニラの東郊テイラオとサン、ゲル、交趾のフエフオとフオンバン及び暹羅メコン河の中流にある國都アエチヤの東南郊など七ヶ所の港町に日本町が建設された。マニラの日本町は早くも文祿初年に創始され、一時三千人の日本人が在居し、鐵國校彼等の交通全く杜絶後も百年以上も存続し十八世紀の始め、我が江戸時

代の中興享保末年にも及んだ暹羅の日本町は、一時山田長政が首腦者となり、同國の王位継承戰に、在留同胞を率ゐて大いに活躍した。此の外日本人の移住した所は、ジャバ島内のバタビヤとバンタン、アンボイナ島バング島、ソロール島、ボルネオ島やスマトラ島のジャンピンなど南洋の島々に及び、半島地域に於いては、東洋の河内やマラッカ、太泥及びビルマの首府アラカンより遠くは印度にまで移住し、各々其の地方に在つて軍事上経済上大いに活動して日本人の声価を高からしめた。

尚斯様な日本人の南洋進出と対南洋交通貿易の發展により、南洋産の多種の物資が大量に輸入される様になると共に、我が商品も未印船に依つて運ばれたり、或は蘭支などの諸外船によつて南洋各地に輸出された。即ち南洋からの輸入品中数量大なるものは、衣服材料の主糸、絹織物、綿織物、麥物や、武器、尾袋、の材料たる鹿皮などの鞣皮、刀剣用の鍔皮、漆料用の漆皮、梳種用の船及嗜好食料用品の砂糖の如き、概して天然産原料品又は粗製加工品であつたのに対し、日本からの輸出品は貿易資本としての貨幣的商品なる銀を始めとして、小判、銅、鉄、硫黄などの如き鉱産物、及び樟腦、米穀を除いては概して雜貨や工藝品などの加工品が其の大部分を占めてゐたのは、當時の南洋貿易を考察するに當り注意すべき現象にして、又引續いて今日

頃に重要柱を増大した南洋貿易の問題でもある。主糸は、支那産の外、東京、ベンガル、ペルシヤ産品が大量に輸入され、鹿皮は、台湾、暹羅、呂宋島から、羊マエ四十万枚も輸入され、一時此等の地方にて鹿が絶滅に瀕した程であつた。日本から、銅、釜、茶釜、鉄などの銅、鉄の製品も多量に出たが、銅鉄も輸出されてバリ島では最近まで日本の竟永通宝が補助貨幣として使用されておた。翁や茶碗も羊々多数輸出され、一旦南洋で積換えられ、遠く印度やペルシヤまで羊々數十個の茶碗が輸出され、更に鐵國役に於いても、オランダ船などに依つても輸出が継続されて、早くから我が商品は広くアジア各地に滲透して、夫々其の地方の人々に愛用された。

## 西域の紫草

久下司

紫草は日当りよき山野の茅茨の中に自生する多年生の草本にして高さ普通五六十程に達し、其の根は或は地下に直下し、或は分岐してゐる。此の根は一年では着の太さ程であるが、三年、五年となると肥厚して小指大より親指大に生長する。茎は此の根の上部より一本乃至数本出で、上部に枝を分ちて、夏日合弁五列の小白花を開く。葉は披針形をなしそ突り、全辺にして、着しき三本の支脈が縱走し、その表裏に剛き細毛が密生してゐる。秋期になると葉腋に萼に包まれた光沢ある二三個の小果が成熟して落下する。此の根の皮部はシコニンと称する紫色の色素を多量に含有してゐて、布帛の染料として美麗なる色彩を出すので古来重用されて来たのである。

此の紫根染が中国に於て始めて世に行はれるようになったのは春秋戦國の頃で、孔子が論語陽貨篇に「夏紫之奪朱也」と云はれたのは、正にこの染色法が西方から中国本土に傳來して、世に愛好され流行を来したので、故事典札を重んずる孔子は慨嘆して、中國の正色たる朱色が殆んど新來の紫色に取つて代られんとするの有害を、當時の世情に於ける道義の衰

頽に比して発した言であつた。

紫草が西域の産よりも寒地の方が良質なることは、日本に於て古来忌手、秋田の産が最も上品であつた如く、中国に於ても河南の産より西域のものがよく、殊に西藏のもの及新疆伊犁河上流の崑山に生育した自然生の紫根は、其の色素の濃厚にして美麗なる爲、非帯に貴はれて来たのである。

此の紫根は専ら染料としてのみならず、その煎汁は尿温反婦人病の良薬として飲用せられし爲、現地に於ては若き細根と雖も人目に触れる時は林搦されてしまふのであつた。殊にこの紫草が西域の特産品の一として中国に輸送される物資中の重要な地位を占むる關係上、その搬出の量は極めて莫大なるものであつた。然るに紫草は其の種子は小鳥が愛好するのみならず、又之に寄生する害虫もあつて、完全に成熟して地に落ちるものは甚だ些少である。然る其の地が乾燥せる處、山であるので、之が適當の温と湿とを得て発芽するものは極めて少いのである。而して其の生育は遅く、発見されれば直ちに丸搦されてしまふので、今日之を生産する地は前記西藏、伊犁の外、蒙疆西北隅の茨明安

参考、牧野博士の日本植物圖譜、古事類苑(植物の部)

註、日本の紫草は西域産のものとは少しく種類を異にするが、日本のものは朝鮮産と殆ど同じで、その実物は派大寺の紫草を一覽せられんことを乞ふ。

嶺、寧夏府阿拉善旗の山地の一部に過ぎない。

此のことは彼の史上名高き甘肅嶺支山の臘脂が絶滅して今日之を栽培するものなく、只種かに西藏に之を見るのみとなった如く、西域の土質と氣候とに適して往時声価を高めておた紫草も、山地の自然生は次第に其の影を失ひ、又農家に於ては經濟上之を栽培しないので、嘗て之が多額を誇りたりし西域の山野も、今は族りに閉拓されて、粟黍や粟粟の畑と化し、其の絶滅を来すに至つたのである。

西域の紫草は今日と雖も尙重要なる染料植物で、西域から毎年駱駝によつて中國に搬入せられる紫根は良品は染料として、細根は藥用として、すべて高価を以て北京、天津の商人に購入せられ、其の一部は京津より更に上海方面に流出して行くのである。

紫根染は其の色彩が美しいばかりでなく、之にて數十回一入くと反覆着色して染上げたる紫色は、久しき使用にも灰色せぬので、原色を好む華人、蒙古人及西域人の上流貴族は極めて愛用する所となつてゐる。又この紫根染の衣を着てゐると、之が紫外線吸收の關係から身体の保温にもよいので、衰弱せる病人も寝具に之を用ふれば元氣を恢復するとさへ云はれ、華人孝子は父子の病に之を得んことを希ふ程であつた。

我國に於ても紫草は奈良時代には盛に栽培が奨励せられ、各地には紫草園までも設置せられ、之が生産の

諸國は延喜式に貢納の年料をも定められるに至つたのである。それが後代になると文化の變遷と共に染料植物にも異変を来し、其の需要は昔程の必要を見なくなつた。此の事は類似の色彩を出すには、甚だ煩雜なる手数を要する紫根を用ひなるとも、藍や蘇芳等を用ひて簡單なる工程によつて染上げることが出来るので、染殿の工匠達に此の法が喜ばれ、世も其の染色にて満足するに至つたので紫根染は漸次衰微することとなつたのである。

されど紫染は世に全く忘れられたのではなく、染色としては最高級の品として上は帝の黃纁染の御袍より殿上人の紫色の濃紫、最高の階位に賜はる紫衣、若き武將の華やかなる紫裾襪の大鎧等に用ひられ、一般庶人の自由に使用することは許されなかつたのである。然るに室町頃より茶の茶が輸入せられて茶の湯が盛になると、茶人や新に抬頭した商民の有閑者流によつて紫染は嗜好として愛用せられる所となり、引いては婦女子の盛装として桃山時代の隆盛を来したのであつた。然るに徳川氏の世となると、其の質素節儉政策より之が使用は次第に退けられ社会より消失せんとしたのであるが、元祿より文化文政の艶麗華美の世となると、再び時代の波に乘つて復活して江戸紫の名を天下に流行せしめることとなつた。されど其の後、幕末の混濁たる世の變遷に災せられ、之が染色は又も何時しか忘

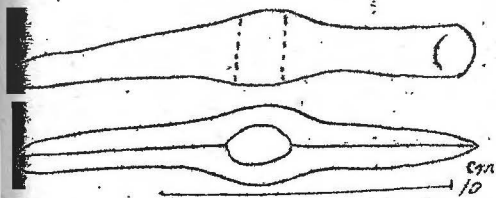
れられて、斜へ西域のアニリン染料が輸入せられることとなりし結果、紫色の染色は此の便利簡單なる北字染料によることとなつたので、紫根染の法は全く忘れられてしまつたのである。其の爲自然生は元より栽培も杜絶したので紫草はその面影を只僅かに興多摩の一部に見るのみとなり、東京としては深大寺及其の附近の家に数本の栽培せるものを見得るに止まることとなつたのである。故に古来の法を傳えて今に存する所は僅かに京都、盛岡、鹿角等の道家となつてしまつた。その爲、嘗ては武蔵野と云へば「紫丹生ふ」姿を思ひ浮べられた程であつたが、今では當時を思ふに足る所は全くなく、只僅かに井頭祭天池の前にもと江戸の紫根商が献納した石燈籠の刻銘に在りし曰が考えられるのみである。此の紫草の歴史は西域の紫草の盛衰とよく似てゐて、往古の色彩文化の先端に立つてゐた紫草であつただけに、誠に遺憾に耐えぬ訳である。

尚紫草は現今中国に於ては染草、紫草としての外に祭祀上に於ても極めて重要なものであつて、蒙古及北支の寺廟の参典には神仏に供へる紅銀頭は此の紫根を羊脂の中にて煮出したる煎汁によつて着色するのである。又正月神前に供へる紅口一ツクも正色のものは此の紫根を以て着色してあると云ふ。

その他、西域の流沙の中より發掘された古寺址より尋々紺紙金子の寫経が発見されるが、之は麻紙を紫根

にて染色して作製した寫経紙で、今日とても西域にては尚此の用紙を用ひてゐる。

次に之が採掘用具であるが、阿拉善地方に於ては多く羊鹿の角を用ひてゐるが、西域や青海方面にては鉄製の小鷹嘴を以て土人が岩山に生えた紫草や其の他の藥草を採取してゐるといふ。今日綏遠附近から左図の如き青銅製の小鷹嘴が尋々発見されるが、其の軟かき青銅の及部は打減らされて隋分破損してゐるものが多い。私の嘗ての所藏品に依れば、其の長さ小なるものは一〇程、太さ一程程あり、大なるものは長さ一五程、太さ一五程程で、其の柄孔は小なるものは円形で径二〇程、大なるものは楕円形で長さ一八程程で之に柄を挿入するようになつて居り、其の先端は四面より削落して尖らし、他端は斧状をなし及中は小は一〇程



大は一五程程になつてゐる。此の鷹嘴青銅器は往時匈奴や鮮卑族の人達か山野に紫草や其の他の藥草等を求めて、其の根を盛に掘つた時の遺物であらう。紫草は以上の如く、古代の彩色文化を訪ねていくと極めて重要な植物であつたのであるが、既に埋滅に瀕してゐる今日、西域の人々も早く之が栽植の方法を講じて其の絶滅を防ぐようになかつたならば、紫草は兼て西域の地

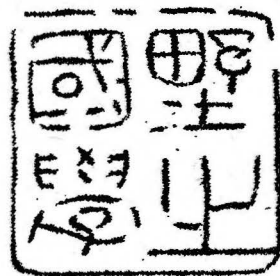
から姿を消して、我が武蔵野の紫草の如くなつてしまふことであらう。  
(旧制大学院)



### 足和学校と

### 鑑阿寺

(史蹟紹介)



昭和六年一月一日(日)史蹟調査の一行は足利の地を訪れ、扶国文教史上に特異の存在を認めた足利学校並びに由緒ある鑑阿寺を見学した。当日の記事は会務報告に纏り、以下この両者について紹介を試みる。(創立)以下挙げる如く諸説紛々としている。

一、小野篁創建説 (鎌倉大草紙等)

二、平安時代国学遺制説 (神原文書、林道春「日光紀行」川上本樹「足利学校故事備考」)

三、足利義兼創建説 (藤時経章「東海談」)

四、足利尊氏創建説 (上野名跡考)

五、藤原秀郷曾孫創建説 (上野伝記雑記)

足利学校沿革誌は「上古ノ国学荒廢セルニ当リ小野篁具教師ニ就キ更ニ学校ヲ創立シタルモノト謂フベシ而シテ他ノ諸説ハ其修理用興等ノ事アリシ、ヲ謬伝セルモノナラン」と断じている。

〔位置〕現在の校地は栃木縣足利市昌平町にあるが、創建時の位置は足利市の東南四丁許りの地矣と、今は陥没し渡良瀬川の流域となり、学校地先という名だけ残つて居り往々古瓦が見えれる。洪水氾濫のおそれがあるので現今の高燥地へ移したものであらう。

〔沿革〕小野篁(ハロニハ五ニ)が国学の遺蹟に就いて本校を創立してから(その子孫)人見氏が代々業を継いだとされて居るが、足利時代に至る迄の間の盛衰の状況は推知する材料もない。鎌倉幕府執事上杉憲実が下野足利荘を管するや、永享二年(一四三九)書籍問覽規定を設け、学校領を寄進し教部の巻冊を明国に求め之を寄贈し、これと前校して鎌倉円覚寺から禪僧快之を奉請(校主の称)に招き、大いに学校としての体裁を整え用興が成つた。再後全国の学稿及多少の俗人が競い集つた。文安三年(一四四六)に憲実は校規を定めしが、上杉氏はその校憲志、憲房も文学を好み善く父祖の志を継ぎ、書籍を寄進し校基を固くした。當時兵馬臣徳の際として此の学校以外に憑る可きものなく、四方から教を貰つて来るものがあつた。快之から第七世の僧九華が禅主となるに及んで、学業最も盛んで天文年中には生徒三千人を擁したと云う。北條氏累代の保護の力も大きく、衣政は曾て金沢文庫に蔵した書籍を寄贈した。安土桃山時代に入り、豊臣秀次が興隆類を接收し禅主を京に伴つた爲一時全く荒廢した

が、秀次の死後、徳川家康は其鞘を學校に返還し、九世の岸主潤空元祐を厚く信任し、学田百名、書冊二百余部に水治字教万類を寄進し（この治字を刊行した「孔子家語」「貞觀政要」「七書」の類あり）火災に罹つた学舎を再建した。八代將軍吉宗は享保一三年（一七二二）日光参詣の帰途立寄り、藏書の珍重すべき事を認識して之に修補を加え、その保管を嚴重にし一般の縱覧を禁じた。その後寛政五年（一七九三）「釈典」「釈義」の式校規学期を定め、更に享和二年（一八〇二）文化八年（一八二二）の西度、廟宇を修理した（現今の建初）明治元年（一八六八）足利藩主戸田忠行は本校の衰へたのを憂へ再興に努め、求道館と称し、僧を校主とする例を廢し、教頭助教を置き、従来の藏書を修補し、釈義の儀を復し（現在は毎年十一月二十三日に執行されている）藩の子弟遠近篤志の者を教育した。廃藩置縣の後、明治五年（一八七三）の栃木縣の管理となつた。同十八年には清國公使館書記官が国命により、本校し、清國で絶版となつてゐる古書を謄寫し、金若干を寄附した事もある。同二五年、足利町に大火があり、本校の杏壇門も其災に遭つたので、同三五年（一九〇二）足利町有として保存する事となつた。

現在は足利市の管理下にあり、足利学校遺蹟圖書館が設置され、従来の藏書の保存を計ると共に一般圖書を備へ公開圖書館として遺制が保たれている。史蹟調査

査に行つた時も、当地の青少年が集い来り熱心に読書勉強にいそんで居るのを頼もしく感じた。「学風と文化史的地位」上杉憲実が再興した頃は専ら儒学を事とする専門教育機關の色彩が濃かつたが、次第に講述の範圍が拓けられ、經、史、子、集全般にわたり教授される様になつた。後には武家社會の要求に応じて実用の学を身につける爲の職業教育に傾いて居り、例えば慶応大庫主にも易学の権威が多く、兵書、医学も講ぜられた。中葉以後は学生も僧徒が多く、學問はその手に造り、學校の生活も禪院の規範に則つていた。中世の儒學に於て本校は右注から更に新注を折衷した特殊な學風で全國に重視され、禪宗以外の學問や外國傳道も未學した。

フロイスの日本史に「日本ニテ綜合分科ヲ有スル唯一ノ大學坂東地方足利下野ブ返ニアリ併シ歐洲ノ諸大學ニ類似セルモノトハ思フベカラズ、學生ノ多数ハ僧侶カ然ラズンバ僧侶タラント學ブモノナリ」とある。クラッセ、ザヴィエル等の宣教師もその存在を認め居り、遠くヨーロッパに迄その名を馳せたのである。中世には寺が教育機關であつたのに対して、本校が専門の學校として存在した点、學問が教誨と離れてゐた点に一步進んだものが認められ、江戸時代各藩實の學生にも樂るものと云ふよう。

〔藏書〕本末が文庫でなく教育機關なので余り多くは

藏書目録も江戸中期以前のものは見当らないが昔時の藏書数は二五〇部前後とされている。中には周易の如く中国では絶亡して本校にのみ在るといふ貴重なものも含む。

書籍は櫃に入れ筆を外被としてあり、丹首丹尾に寄進者の名、花押があり、「野之園号」「足利学校」の印を捺す(ハカツ下参照)藏書中昭和十三年七月四日国室に指定されたもの。

○尚書注疏	八冊	京版	上杉憲実寄進
○毛詩注疏	三十冊	京版	上杉憲実寄進
○礼記正義	三十五冊	京版	上杉憲実寄進
○春秋左傳注疏	三十五冊	京版	上杉憲実寄進
○周易注疏	三冊	京版	上杉憲実寄進
○古文孝經	一冊	京版	上杉憲実寄進
○論語義疏	十冊	京版	上杉憲実寄進
○周易	二冊	京版	上杉憲実寄進
○周易	三冊	京版	上杉憲実寄進
○周易	五冊	京版	上杉憲実寄進

沿巻 王朝の中葉、藤原秀郷の孫、源朝名兼行の子成行は足利大夫と称して此の地に居住した。ついで源氏の経基、頼義、義家は關東武士の帰服を受け源家の基礎を固め、義家の三子義國は新田、足利の祖となり、その長子義重は新田氏を称し、次子義康は足利氏を称して足利に居た。頼朝が兵を争けるや、義康の三子義兼、その軍に参り、政子の妹時子を妻とし、勢威は新田氏を

凌いだ。後、佛門に帰依し、建久年間(1210)の事で、足利寺を興し、寺領一万五千坪を寄進した。建久年間(1210)の事で、足利寺を興し、寺領一万五千坪を寄進した。上人と云う。

新義興吉宗の名刹で高野山に擬して七堂伽藍を建立し、運慶の彫った大日如来を安置した。その後、満等も寺領を寄進したが、一時寺運が衰き、徳川家康が復興に努め、遂に關東五名刹の二に数えられるに至った。多数の空物と共に、鐵阿寺文書と称せられる貴重な古文書を蔵している。

〔建築〕現に境内に仁王門、本堂、鐘樓、護摩堂、多宝塔(切経藏、足利氏の歴代靈廟などがある。その中、本堂は天福二年(一一三三)建立と伝えられ、五間、單層、星振入母屋造、木見葺、唐様の手法を用いたもの。又鐘樓も折間三間、深間二間、重層、星振入母屋造、木見葺、下部は袴腰となり、勾欄廻らし軒出添く、共に鎌倉時代の特徴を具備した建築である。

文獻

- 川瀨一馬 足利学校の研究
- 川上玄樹 足利学校事蹟考
- 長沢規矩也 足利学校秘本書目
- 足利学校遺蹟圖書館 足利学校沿革年表
- 八代国治 足利氏の文化と皇室御領(歴史と地理三〇五)
- 藤岡謙平 足利学校の研究 (国学院雑誌一六、一、二、五)
- 新村出 足利学校の盛時と面教宣傳(史料一南藝五七)
- 平泉澄 足利文庫と足利学校(中世に於ける精神生活)
- 渡辺世祐 足利範及足利学校に就いて(史学雑誌三五、二)
- 足利行述 鎌倉時代の儒教
- 山越忍空 鐵阿寺小史
- 足利庄鐵阿寺 (安岡編)



## (會員隨想)

思ひつゝいたまへ

竹内直良

少くとも今から一世紀程前まで、我が國の學問は殆んど儒學であつた。従つて學ぶことは同時に聖賢の道を知ることであり、その目標は治國平天下に置かれた。ところが時代の進歩と共に學問の内容が各分野にわかれ、夫々が専門の領域に深く突きこむやうになつて来ると、新しい智識の獲得に最大の興味が向けられて、とかく人間を作るといふことが忘れ勝ちになつた感がある。勿論智識の獲得は我々の重大な仕事であるが、それは常に手段であつて目的ではない。もし我々がその手段のみあくせくするならばそれは單に學問の技術屋に過ぎないのである。

結局學問は身につければならぬ。特に人間を研究対象とする歴史學においてこれは特に要求される。歴史學は安易な空想と身勝手な独断を許さぬ學問である。あくまで過去の事實に立脚しその上下自己の魂を磨いて行くのである。制度の欠陥もあるけれども、現今の學生諸君はこの眞の目的をはつきり掴まずに、唯學位を稼ぐこと、資格を得ること、に日常が追はれてはおないかと思ふ。何でもよいから規定の學位だけ得て置くといふやり方では中味の無い雜誌

を求めて得意になつておる様なもので自分自身はいつして向上しない、少くとも史學に志して集つた我々には既に相當の覚悟がある筈である。學力の不足を云々するのではない。學問への志があるかどうかを問題とするのである。一度志した後は一生を期してこれと取らみ合つて見る。そうして單に無節操な物知りとなるよりも、乖背の我と今日の我とを内省して多少なりとも魂が磨かれて来たかと考えることが大切であると思ふ。

## (會員隨想)

若年寄

三年酒巻正三郎

私の理想は「日本的なる世界人になる」とに在る。有史以来初の敗戦そのものが幸であつたか不幸であつたかは未だ結論を下すには早いと思ふ。何故ならばその歴史を身を以て今日作りつゝ、あるのが執連であるからである。載柙鳥福と云う諺がある。個人としても、國家としても理想を失つた時に亡び去るものである。敗戦の結果として幸であつたと云い得る様に身を以て歴史の一頁つゝを綴つて行きたいものである。

生を受けて約四十年、幕府三役の一人(若年寄)の様になつた。私が三年生になつてからもう一年たつた。妻は胸の病に臥し、老父母と子供をかへて、現世からの逃避も許されぬまゝに、現実と四つに取組む

べく、埼玉縣教育局の黙認を得て学生たらんと決心したのは実にこの爲であつた。毎日往復六時間、夜学を強行する爲には一日の睡眠時間は五時間内外となり、晝間勤務と累して両立するかと疑はれたが、幸にして師範卒業以来約二十年間、一日の欠勤も無かつた健康力が物を云い、出席率も最も優秀なる仲間の一入として一々年を経過し得たことは、裏の支えとして強烈なる意志と感情とが健康力を鼓舞したからであると思われる。同級の学生も亦頼もしい人達ばかりで和合一致し、戦後教育上最も軽んぜられてゐる史学に、流石は先見の明を以て忘すだけあつて、私は一人一人に頼ずりしたい様な親愛親をさえて持つてゐる。

先生方が凛然たる、或は聳え満々たる、或は自信横溢せる、或は超然たる、或は眼光紙背に透る如き、各々の特長を發揮なされて一人一人皆非常なる魅力を以て学生層を包擁せられておられることは、此上なく頼もしいことであり、史学会を發展せしめたい我々の希望と完全に一致する存在であられる。

夜間学生として、教育長補習生として、新制中學校長として、病妻老父母を拘へ女子供の父親として、公私共に苦難の道は猶遠い。然しながら温い先生方の包擁力と頼もしい同級生の和合の力が私に鞭打つて、恙無く辛業の旨迄押切れることを確信して疑わぬ。

## 学 内 便 り

○新制大学院の人文科学研究科に昭和二十七年頃から特望の国史専攻の課程が設けられる運びとなつてゐる。系長途上の史学科にとつて喜しい限りである。

○東洋史の岡野先生は今般東京大学の方の専任となられたが、今後も引続き講師として講座を担当される。

○中央労働学園大学は経営困難から法政大学に合併され、教授職員学生は施設蔵書と共に引継がれ、社会学部として昨秋から発足した。日本一の社会学部として期待され、本学も綜合大学の面目を一披と發揮するに至つた。殊に約六万冊の蔵書は社会労働問題に關する内外の圖書雜誌を集めて居り、大原社研の圖書館と共に著名なもので、各回共産党、労働組合の機關誌など貴重な歴史的文獻が多い。

芝本尾町の校舎には工学部も移つて共用してゐる。○経済学部では大正九年東大、京大に續いて独立の学部となつてから三〇年を迎え、昨年一月に記念式典を行つた。大内總長の挨拶、天内原東大總長(当時教養部長)一万田日銀總長の祝辞等があり、他に各種の記念行事が催された。

# 会務報告 昭和二十六年 度

四月二(日)至

史学会總會及び新入生歓迎会。

總會に於ては会長藤井先生の意義あるお話の後、委員笹目氏より会務並びに会計本年度の予算事業計画の詳細に亘る説明あり、丸山先生の史学会規約の解説は堂に入ったものである。続いて新入生歓迎に入り、竹内先生から本年度の単位獲得の説明があり、更に出席された先生方より御挨拶があり有意義な一時を過ごした。

五月一九日(土)

卒業論文についての懇談会。

六月一七日(日)

第三回史蹟調査。

目的地 鎌倉 参集者約三〇名。入梅時で非常に危ぶまれていたが珍らしく好天気に恵まれ、予定の行動が出来たのは何よりであった。特に竹内先生の取計いで山覚寺に住む玉丸さんの舍利殿の御説明は本當によかった。本年度今後の行事予定について連絡委員会(於研究室) 藤井、竹内、丸山、関野各先生、桜井

一〇月三日(土)

再治(四年)、安岡、林各委員出席。本年度今後の行事計画を纏る。(他の委員会の記事は略す)

講演「最近の歐洲諸状勢について」文芸春秋新社編集局長池島清平氏 池島氏の歐洲三月月に亘るペンクラブ大会出席とそれを中心とする最近の状勢をユーモアたっぷりに話されたこと。特に氏は東大西洋史出身とあつて種々史的に述べられたことは多くの暗示と指導を受け喜しかった。結局国内外の問題は日本人自身にもその一因ありとされる。

一月一〇日(土)

第三回公開講演会(於学生ホール)

後援 会長 渡邊 藤井甚太郎 印度の封建制と英國統治下の諸問題 教授 和田 久徳 米国の極東政策 講師 清水 博 近世に於ける日本と南洋との關係 講師 若生 成一 尚当日の主題「太平洋及び印度洋を繞る諸問題」に關係ある写真數十枚を、藤井先生の説明付で幻燈にて映写し、有意義な教時間を送り、午後六時終了

七月一四日(土)

(一月十八日)

した。

来会者都合百五十名皆熱心に聴講す。

(講演要旨は別掲の通り)

市田回史蹟調査

目的地 栃木県足利学校

従来足利学校に行つたもの少く、為に

此の地を選んだことは至当であつた。

殊に当地の通教住の川田昇さんの先導

で種々便宜を与えて貰つたことは感謝

に堪えない。

午前八時三〇分 東武浅草駅発

一一〇時三五分 足利市駅着

藤井 竹内 丸山各先生に学生 卒業

生及び一般参加もまじえて計二〇名、

晴天に恵まれ時の温々るもの忘れて熱

心に見学し、予定の時刻を一時前延長

した。

足利学校の峯岸さんからお話を伺い、

貴重な蔵書の一部を見せていたゞく、

更に銀阿寺を見学、一往取山越忍清さん

の懇切な説明があつて、古文書等画室

級のもの多数を見ることができた。

又足利高校教頭の源田さんも同行で種

々教えて下さつた。

午後三時五〇分足利市駅発を帰る。

当日川田さんに撮つていたゞいた写真

は参加者に贈呈する。

(桜井)



昭和26年度法政大学史学会会計報告

(昭和26年2月20日ヨリ昭和27年1月20日迄)

収入の部		支出の部	
会報第二号ヨリ繰越高	9,711.00	会報第二号印刷代	5,750.00
会報刊費立金繰越高	1,500.00	新入生歓迎会茶菓代	3,500.00
会 員 会 費		第三回史蹟調査	3,857.00
教 授	300.00	通知状	400.-
新制一回(25年度)	2,200.00	参観謝礼其他	1,887.-
卒業生	4,762.50	茶 治	1,570.-
四 年(25年度)	3,300.00	綱 会	2,920.00
〃 (26年度)	2,200.00	通知状	240.-
三 年( )	10,050.00	講演謝礼	2,000.-
文学科研究費ヨリ講演会補助	4,000.00	接待費	680.-
学校ヨリ講演会補助	9,500.00	才三回公開講演会	14,373.00
その他雑収入	550.00	案内状	3,864.-
		ポスター	2,335.-
		講演謝礼	3,000.-
		立看板プログラム	1,110.-
		マインク	500.-
		地図作製費	110.-
		交通費	789.-
		雑 費	2,665.-
		才四回史蹟調査	2,085.00
		通知状	250.-
		参観謝礼其他	1,260.-
		写 真	575.-
		雑 費	1,864.00
		事務用品等	
		諸通信費	1,858.00
		卒業生会報送付 普及状、その他	
		委員経費	1,563.00
	53,073.50		37,770.00
		差引残高	15,303.50

(附記) 教授より貴重なる研究費の中から四千円の補助を戴いた事に対し厚く御礼申し上げます)

現在高内訳

振替貯金 三二六二四五〇銭  
 会 計 課 六八〇〇円  
 現 金 五二四一円

(再 浴)

# クラス便り

〇四年

卒業論文は我々四年生にとって、何と云っても最大の課題であった。思えば去年の春四年に進学した当時、日夜深刻な程に我々の念頭に留置つて置れる事が無かつたのは、私一人ではなかつたであらう。

元来卒業論文は、樂しがるべき筈であるのに、河政かとも我々の頭を悩まし続けたのであらうか。史学科に入学したのは、一史学こそ最も好きな学問であり、又生きて行く上に必要であると考えたからであらう。

卒業は我々学生が学窓を巣立つに當つて、過去における学習の最後の途上にあつたわけであるから、誰しも全知全能力を傾注して、これに當らうと言う野心を持つ事は同じであらう。

併しこうは考えていたとしても、その前途には幾多の障害がある。その一つに時間の束縛がある。勿論この様な障害は充分に承知してはいるもの、そこで大きな悩みがあるわけである。

四年生が卒業に精力を傾注しようとする期待していたのは夏休であつた。だがこの様な期待は次々に裏切られていつた。去年の酷暑の真中に、各々が自己の苦手として逃避して来た科目、それを嫌が亦でも受講しなければ卒業出来ないとなつては是非もない。クラスの者

が夏の補講に来て顔を合す時交す言葉、それは「卒業より外はなかつた。又、たまにの日曜日の上野の山で会う事も屢々あつた。そうして交す言葉はやはり同じであつた。この様な状態が遂に提出期日迄続いたのである。併し今はもう過去の事となつてしまつた。各人は夫々自己の論文に対する反省を行い、満足に思っている者、或は不満足に思っている人もあらう。

だがクラスにとつて、卒業を通じての一つの大きな收穫は、同病相憐れむというか、クラスの全員が学校で会うのは僅かな時間であるにも拘らず、百年の知己の如く親しくなつた事である。

希承はこの心情を持續けて、藤井先生が会報第一巻の発刊の言葉で云はれた通り、同門同学の我々は一致団結して史学の研究に邁進し、以て法政大学史学会の発展を期そうではないか。(三七・一七 丹治記)

〇三年

アプレゲールという流行語が如何なる意義をもつて、いるかは甚だ微妙である。しかし乍ら悪い意味での意義はかつて、大宅一氏が東京新聞紙上でも論じていた如く、選挙の浮動票層、ベストセラー不層なるものがそれらしい。即ち权威の前に甚だ弱いという。

羽仁五郎氏は又いつか、「一史は批判である」と言つていたことがある。この語は又逆説的のようだ。

持に、で我々三年の諸兄弟の中に、少くとも思い  
慮でのアプレゲールはないという事を言いたい。

メンバーは又中々多様なブライテイーに富んでいる  
が、うまくまとまっていることが大きな特徴である。

墓に甘名ばかり同志集まり神楽坂の一角で懇親の宴  
を張つたことを申上げて置く。構成員の中核が初の教  
養部出身或は高師部等の出身でも、本大学には因  
縁浅からぬものがあることもこの因をなしているのか  
も知れない。

このような次力の下に史学会の運営等の面にもお力  
添えして行きたいと思つているのである。

河はともあれ、個人にせよ、団体にせよ、あくまで  
主体制を確立して行きたいとは前述の呉からして御了  
解していただけると思ふのである。故に本年度の三年  
生の諸兄弟には必ずや期待出来得ると信ずる。

最後に教養部出身に宮崎君が家業多忙のため退学さ  
れたことを附記したい。(一九五二・一七 寺沢記)

◆ 卒業生消息 (旧制二回)

(氏名) (勤務先)

- 鷗 岡 英 雄 北区役所
- 金子 昭 武 百鬼区立八中学校
- 鈴木 英 市 文部省
- 豊 岡 晃 葛飾区立栄又小学校
- 椎 名 浩 亮 船橋市立船橋中学校

- 渡辺善四郎 文京区立筒口台町小学校
- 田中三雄 新宿区立東戸山小学校
- 並木正雄 都立立川高等学校
- 大坪清 東鉄経理部汐留用品庫
- 原勇男 法政大学第一高等学校
- 小沢慶二 大田区立八小学校
- 村上直 西多产郡福生中学校
- 浜中尚治 杉並区立能井三小学校
- 西山秀一 足立区立三中学校
- 永沢光義 都立松原高等学校
- 石出健 千葉県立千葉商業高等学校
- 平田幸平 埼玉県立千歳中学校
- 加藤直子 都立北園高等学校
- 湯浅一 練馬区立南進二小学校
- 松丸素雄 神戶紙業株式会社(江戸川区平井)
- 馬場弘二 深川区立三中学校
- 紫田実 新宿区立日谷二中学校
- 石塚義一郎 私立中野中学校
- 鈴木幸十郎 北区立赤羽中学校
- 清水賢蔵 法政大学第一高等学校
- 高山茂 船橋市立湊西小学校
- 石川政雄 八王子市立六中学校
- 水村昇 千代田区総務事務所
- 松元新正 渋谷区立幡代小学校

卒業論文題目

新制第二回(昭和二六年度)

初期自由民権運動の性格

宮下 鉄三

武蔵野新田開発と特に関前新田を中心として

桜井 芳郎

東海道宿駅の一考察と特に保土ヶ谷宿について

中山源太郎

後崇光院の御系統に関する研究

興村 哲枝

明治初期に於ける治安の維持について

鳩山 茂

日清戦役の一考察

大嶽松太郎

アメリカへの新移民を中心とした移民の背景事情

小島 然太

藩財政の研究―特に長州藩及肥州藩を中心として

丹治 健藏

漢代に於ける西域の問題

廣田 宏

江戸時代に於ける宿駅―特に中山道望月宿について

浅尾 文子

薩摩藩と琉球との関係

安藤 利雄

江戸時代大阪町人氣質の研究

野田 均

思想的に見たアラビヤ科学に関する考察

高木 一郎

中世末期の英國に於ける女王権の失墜について

中山 公彦

甲陽軍略史考

馬場 一政

助郷の発生と其の社会生活に及ぼせる影響について

小沼 田夫

―主として農民生活

鎌倉時代の思想と宗教

―主として農民生活

青藤 孝

秦の郡縣制度について

山田 耕作

十九世紀に於けるロシアの農奴解放について

八雲 香枝

―主として農民生活

廣東貿易を通じてみた英清關係に対する一考察

權田 勇夫

―特に阿片戦争に至る迄の通交關係を中心として

天保期に於ける大阪の社会情勢―特に大塩平八郎の

馬場 陸朗

乱の原因について

江戸幕府の異学禁止による藩校の受けた影響

伊藤 光良

近世町人社会の一考察―特に文学上に現われた町人

土屋 君枝

を中心として

江戸幕府崩壊過程に於ける政治現象の分析

相川 永嘉

サポナロラを中心としての私のルネッサンス観

西原 暹子

イギリスの近代化にカルヴァニニズムの及ぼした影響

宮氣 美代子

明治維新前夜に於ける教育の変遷

藤宮 忠男

竹内 滋子

藤宮 忠男



## 編集後記

前号で公約された活版刷りは残念ながら実現出来なかつたが、公開講演の要旨も今迄に比べ、い詳しく発表するなど、限られた範囲で出来るだけ内容の改善に歩を進めたつもりである。

しかし本号は事情により発行を急いだため、多々不備の点があると思われるが、どうか御寛恕願いたい。

◇ 切実になつて急にお願ひして、しかも早速原稿を寄せて下さつた方々には衷心より感謝の念にたえない。

◇ 本号には各年次の卒業生消息をお伝えする予定であつたが、一部しか集らなかつたので、他の年次の分は次号には是非載せたい。そこで卒業生各位も近況

消息をどしどし史学会宛（法政大学史学研究室内）に寄せて下さる様切望する。

◇ 尚短時日の間に消息調査などに努力された旧制二回の清水氏の労を多とするものである。

◇ 史学会も年を追つて会員数を増し頼もしい限りであるが、更に新学年度に当り、史学科の充実発展を期する上、同学同好の士を多数本学の門に送られる様希望する。

◇ 史学会としては別項の如く、今春関西旅行を計画して居り、この史蹟めぐりの報告は次号を賑わすことにならう。来年度は少くとも年二回発行を実現したい。  
(編集委員)

## ○ 関西旅行予定

史学会では初の試みとして大要次のような関西史蹟めぐりを予定しています。

- 一、指導 藤井先生
- 二、費用 概算三千五百円
- 三、期間 三月廿九日夜東京発  
三泊五日  
四月三日朝 東京着
- 四、行先 奈良及び周辺の杜寺  
京都の史蹟名所

尚来年度は少くとも同じコースの旅行の予定はありませぬ。  
又日程は卒業式の日取で変更するかも知れません。